

個性を認め合い、協働する子どもたちを育てるため 学校と教員も「違い」を発揮し、できることから始めよう

ドルトン東京学園 中等部・高等部 副校長 安居長敏



混乱のなかで生まれる協働もあった

新型コロナウイルス感染拡大を防止するための長期休校措置で見えてきたことは、社会の急激な変化の中にあつても頑なに「変わつてこなかった学校」の限界である。既存の枠組みやオペレーションでは、もはや対応しきれないということが白日の下に晒された。そんななか、全員が学校に集まつて学ぶという画一的な「教室型一斉授業」に代わり、「オンライン授業」が一気に脚光を浴びた。これまでの授業をそのままオンラインで代替することはできないが、時間や場所に制約されない学びが可能となる。これまで二の足を踏んでいた学校や先生が実際に続々と取り組み始めた。

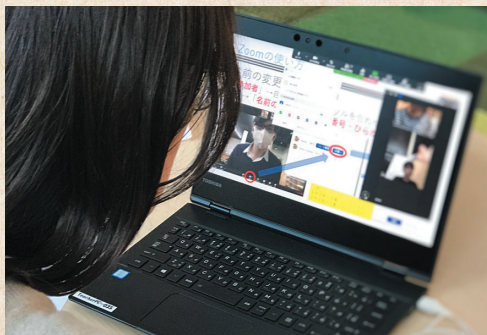
中1からBYOD(Bring Your Own Device)のノートPCを全ての授業で使っている本校も同様だった。生徒・先生とも在宅でオンライン授業を行う形に切り替え、朝礼や終礼、授業、学年集会、探究(ラボ)活動、オフィスアワー、養護教諭とスクールカウンセラーとの談話室、三者面談などさまざまなことを、段階的に拡充しながらオンラインで実施した。

この4月に着任したばかりでいきなり中1の担任になった先生

も、不安とともに生徒と向き合つた。いろんな先生たちと練習を繰り返して準備しつつ、「Zoomを華麗に使いこなすことより、入学間もない生徒の『安心感』に集中しよう」と覚悟。そして迎えた緊張の初ホームルーム。使い慣れないパソコンに戸惑う生徒が多いなか、パソコンが得意な子たちがZoom越しにキーボードを映したりして教え始めた。その後も、いろんなところで引つかりながら、その度にクラスで生まれる協働。「クラス内はなかなか良い雰囲気。一週間で、オンラインだけでここまでなるってすごいなあ...」。生徒の柔軟な発想と対応に、目からウロコだったという。

解き放たれた、先生たちの個性

本校に限らず、こういった場面は多くの学校で見られたに違いない。緊急事態に直面したこと、これまで失敗を恐れてやらなかった先生や周囲に合わせようと個性を封印してきた先生たちが、いきいきと自分を発揮し始めた。「何が正しいか」ではなく「生徒のために何ができるか」を考え、今の状況でできる最善を「やってみる」ことを繰り返しながら、どんどん修正していった。



ドルトン東京学園中等部・高等部では、学年の枠を超えた協力体制により、年度始めからオンライン授業に取り組んでいる。そのなかで、教室に入りづらかった生徒がオンライン授業には積極的に参加できたことなど、いくつもの気づきがあったという。

多様性こそが、いま必要とされる課題

では、これからの学校で大切なものは何か。

戦国時代、天下統の結果として起こったことのひとつに、度量衡の統一がある。関東で年貢を払うときに使われる升と京都周辺の升、中国地方の升では容量が全然違っていったものが、全国で共通規格化された。それによって醍醐寺の五重塔など、それまでに建てられた古代の塔のような「職人の天才的な仕事」ができなくなった。一方、江戸時代になって建てられた塔は規格物。建売住宅を作るように仕様が全て定まっていって、全国

生徒が「どこにいても、自分で学んでいける『チカラ』をつけるのが学校の役割であり、その手段として、オンライン教育には大きな可能性がある。「できることを、やってみよう」というゼロイチの発想が、先生個人の取り組みから学年、学校全体へと広がり、まさに「教育の目的」や「学びの本質」を自らボトムアップで示す結果となった。

そう考えると、今回の一斉休校は学校において「大手術のチャンス」だったとも言えるのではないか。怪我をして膿がたまっていた患部を前に、薬を塗ったり絆創膏を貼ったり右往左往していたところに、名医が堂々と切開して治すかのごとく、抜本的な治療に手をつけてよいことに誰もが気づかされた。この経験は、今後の学校のありようを大きく左右することは間違いない。本校では、オンラインとリアルの「ブレンディッド・ラーニング」で、より個別最適化した「学習者中心の教育」を推し進めていきたいと考えている。休校が明けた先にあるのは、「かつての学校に戻す」ことではなく、「新たな学校のカタチを創る」ことだと覚悟したい。

一律に同じような塔を建てられるようになった。（『日本史 自由自在』本郷和人著、河出書房新社）

そうなるとう当然、要求されるのは「規格に従って忠実に手早く仕事をする職人」だ。これを教育に当てはめてみるとわかりやすい。本来、教育という営みは「醍醐寺の五重塔」を建てることだったはずだ。それが、いつの間にか「効率」というコトバに染められ、「建売住宅」を建てることに変わってしまった。規格化された一律の対応を「義」とする体制、それを維持することが「善」という価値観、周りに合わせてみんな「一緒」という「脅迫」めいた圧力：そういったものを正義だとする学校や先生が量産されてきた。

ここで、いま一度みなさんに問いたい。つくったかったのは「建売住宅」ですか？……と。

日本ほど、金太郎飴のごとく画一化された価値観で生き、それを生み出す制度が顕著な国はない。学校があまりにも同質性を求め、「みんな一緒」を賛美してきた綻びが随所に出始めている。自分を犠牲にして違いを隠し、周りと同じように振る舞うことで心身が悲鳴をあげ、不適応という形で身を守る生徒もいる。

よく考えてみよう。人と同じである必要がどこにあるだろう。むしろ、違う方が魅力的であり、持って生まれた「かけがえのない個性」をお互いに認め、違いを協働のチカラに変えることでこそ社会が維持され、豊かになっていくのではないだろうか。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、これまでの当たり前が脆くも崩れ去った。いまこそ、それぞれの学校が「違い」を発揮し、できることをやっていく時だ。周りと同じことができないと悩まなくていい。他との違いをより鮮明にし、その価値を世に問うことの方が大事だ。同じであることで救われる対象と、違いがあることで救える対象はどちらが多いか。その答えは、言うまでもなく明らかだ。

Profile

やすい・ながとし ● 1982年滋賀女子高校（現・滋賀短期大学附属高校）に赴任。2002年、教員生活に区切りをつけローカルFM局を設立。個人でITサポート事業も始める。06年、教育現場に復帰。滋賀学園中学・高校、沖縄の学校法人アミックス国際学園を経て、19年、学習者中心の教育メソッド「ドルトンプラン」の実践を掲げて同年開校したドルトン東京学園中等部・高等部の参事（副校長補佐）となり学校づくりに携わる。20年より同校副校長。自らを「学校に身を置く自由人」と呼ぶ。